

經濟論叢

第113卷 第1号

島 恭彦教授記念號

献 辞	木 原 正 雄	
現代世界の労働者階級	大 橋 隆 憲	1
所得税制史にかんする一つの覚書	廣 田 司 朗	31
大蔵省預金部改革前後	宮 本 憲 一	48
マルクス経済学と財政論	斎 藤 博	81
インフレーション研究の課題	横 尾 邦 夫	101
「向坂派」国家独占資本主義論の論理構造	坂 井 昭 夫	119
ニューディール期における政府金融機関の活動	青 木 圭 介	139
行政手段と公務労働	池 上 惇	165

島 恭彦 教授 略歴・著作目録

昭和49年1月

京 都 大 学 經 濟 学 會

マルクス経済学と財政論

齋 藤 博

I

マルクス経済学において、国家財政や世界経済に関する理論を、経済学の全体系の一構成部分として把握しようとする仕事は、マルクス自身が主として1857～59年代の経済学研究、たとえば『経済学批判序説』、『経済学批判』の序言などで述べたとおりである。すなわち、「私はブルジョア経済の体系をつぎの順序で考察する。——資本、土地所有、賃労働、それから国家、外国貿易、世界市場。はじめの3項目のもとでは、私は近代ブルジョア社会がそれに分裂しているところの3大階級の経済的生活諸条件を研究する。他の3項目の関連はおのずから明かである」¹⁾と。このマルクスの経済学批判のプランをめぐって、いわゆるプラン論争が展開されたが、体系の後半部分は現行『資本論』において、少くともそれ独自の展開として含まれていないという点では衆目の一致するところであろう。

マルクスの経済学批判体系とプランをめぐる諸問題の一つは、プランの後半体系「国家・外国貿易・世界市場」をいかなる理論的性格のものとして、またいかなる理論的方法によるものとして把握するか、経済学における「国家」範疇をいかに理論的に展開し、解明するか、ということであった。このことは、すでに島恭彦・宇佐美誠次郎両教授²⁾による問題指摘と、それへの武田隆夫教授³⁾による批判を契機として展開された戦後マルクス主義財政学の方法論争の

1) マルクス「経済学批判」字高訳、昭和24年、19ページ、以下「批判」と略す。

2) 島恭彦「財政学原理」昭和29年、宇佐美誠次郎「財政学の『独自性』について」「経済志林」第17巻1,2号。

3) 武田隆夫「マルクス主義経済学と財政論」有沢・宇野・向坂篇「大内兵衛先生選歴記念論文集」昭和28年。

主要課題であった。この論争の問題をいま簡単に省みるならば、マルクス主義財政学的方法的確立を、スミス・リカードウ財政学の批判的摂取にもとめられる島・宇佐美両教授にたいして、資本主義の生理学としての経済学の発展を、経済学からの財政学の分離過程にもとめられ、そこからポリティカル・エコノミー批判としてのマルクス財政論を主張される武田教授によれば、マルクス『資本論』がポリティカル・エコノミー批判を副題としていることがしめすように、マルクスは経済理論と経済政策が混淆しているような政治経済学を批判したのだと主張される。

このような論争点は当然のことながら、マルクスの経済学批判体系における国家の取扱い方の問題にむすびつく。島・宇佐美両教授は、今日のわれわれに残されたマルクス経済学批判体系のプランの未完成な部分である「3, 国家形態におけるブルジョア社会の総括。それ自身に対する関係においての考察。『不生産的』諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。」⁴⁾が財政学の対象であり、マルクス『資本論』の未完成なこの部分が、マルクス財政学にとっての課題だとされたのである。これにたいして武田教授は、宇野教授の方法論に依拠されつつ、現行『資本論』を自己完結した体系とみなし、そこでは「財政問題は捨象され、財政論は、『経済学の体系の中の一つの重要、且つ不可欠な部分』(宇佐美教授…引用者)とはいえないものとなっていること」⁵⁾は、当然なことであると主張された。そして同教授は、マルクスのいわゆる経済学のプランなるものを、経済学の理論的体系のプランとして理解すべきものではなく、ポリティカル・エコノミー批判のプランとみなして、そのような意味における「国家」の項目の取扱い方を述べ、したがって「国家」の項目にふくまれるものは国家および国家のおこなう諸政策の歴史的意義と歴史的限界の解明——ポリティカル・エコノミー批判の一面をなす経済政策論の批判——を積極的に展開しようとしたのだと主張されたのである。

4) マルクス「批判」360ページ。

5) 武田論文, 264ページ。

このようにみえてくると、マルクスのいわゆる経済学のプランにおける「国家」の範疇が経済学批判体系の一部として経済理論的に展開しうるかどうかというこの鍵は、マルクスのいわゆる経済学のプランを、どのように理解するか、にあったともいえよう。小論の試みは、したがってマルクスによる経済学プランが、いかなる性格のものであるかを明らかにすることを通じて、経済学における国家の取扱い方とその性格——理論的性格——を考察しようとするものである。

II

武田教授によれば、マルクスの理論体系は、ポリティカル・エコノミー、すなわち経済理論であると同時に経済政策論でもあるところのものを批判することを通じて確立されていったものであった。このようにして確立されたマルクス『資本論』について、武田教授は独自の解釈をされる。第1に、ポリティカル・エコノミー批判が前面にはあらわれておらず、直接には、その叙述の過程において、資本制生産様式の内的構造＝法則を解明することを目的とするかぎりイギリス古典経済学、とくにリカードウの「原理」——完全とか真実とかいう問題を別にすれば——が目的としているものと本質的に同じものだとされ、そのかぎりにおいて、マルクスはリカードウの単なる「後継者」にすぎないとされる⁶⁾。だが同時に、マルクスが『資本論』の副題を、「原理」とか「一般理論」とせず、あえて「ポリティカル・エコノミー批判」としたことに深い意味があり、それを正しく理解することが必要であり、その点にこそ、マルクスがイギリス古典経済学の「正統な後継者」（傍点は武田教授）といわれる理由があるとされている。すなわち武田教授のリカードウ評価の独自性は、リカードウが資本制生産様式を社会的生産の永久的・絶対的形態とみなした非歴史的態

6) しかしながら、マルクスは、古典学派が富の諸形態を分析し、それらの内的関連を多様な現象形態と区別しようとするが、彼らは、それらを所与の前提として出発しているから、ただ分析によってそれらの統一に還元することのみに専念していることを批判しているのであって、マルクスと古典学派では内的構造の分析そのものが本質的に異なっている。

度が、かえって彼の経済学に「つよい実践的、政策的性格をあたえているということに注目」⁷⁾されるところにある。そして財政ないし租税の問題がそのようなかたちで論議されるということは、かえってリカードウの経済学になおそれだけ、科学としての未熟な点があると主張される⁸⁾。武田教授によれば、マルクスがイギリス古典派経済学の「正統な後継者」といわれ「天才的な完成者」たりえた理由は、まさにポリティカル・エコノミー批判にあった。そしてマルクスのポリティカル・エコノミー批判の方向は、イギリス古典派経済学の非歴史的態度を批判し、資本制社会をも特殊歴史的な社会形態とみることによって、リカードウにおいては飛躍されてしまう『必要な中間項』が一つ一つあきらかにされ、リカードウが『直接的な仕方で……一致を証明しようとしている』ところの経済学上の諸範疇のあいだの内的諸関連が正しく把握され、リカードウが意図しつつも、そのブルジョア的限界によりさえぎられて不十分にしか達成されなかったものが、はじめて達成されたといわれるのである⁹⁾。かくして武田教授によれば、「いまもし『資本論』において意図されていることと、達成されているものとの関係が、ここにみたようなものであるとすれば、そのような『資本論』においてリカードの『原理』にはなおふくまれていた租税に関する論議がもはや清算され、消滅していることは当然のことといえよう。なぜならば一方においては、すでにみたように、『資本論』では、出発点としての商品が、それに内在する矛盾によって展開する運動を、論理的にたどるという仕方では資本制社会の内的構造を、解明する意図が達成されているのであるが、そのさい、租税の問題は、この過程のなかの『必要な中間項』でもなければ、またこの過程を『諸階級』でとどめずにさらに論理的に追跡してゆけば、当然達着するという問題でもないからである」¹⁰⁾。

以上の武田教授の所論を通じて明らかとなることは、古典派経済学の非歴史

7) 武田論文、253ページ。

8) 同上、247-8ページ。

9) 同上、258ページ。

10) 同上、258-9ページ。

性——ポリティカル・エコノミー（理論であると同時に政策論）、政策的主張——、科学としての不十分性、限界と結びつけられていることである。宇野教授の経済学方法論に依拠される武田教授にとって、マルクスの「経済学批判序説」で述べられている経済学の方法としての上向過程は諸階級で終結し、原理＝資本制経済の内的編成の一般的・抽象的規定はここで完成・自己完結するものとみなされるのであって、「資本論」はこのような自己完結的運動体の内的構造を明らかにするものである。そのような意図からして、租税の問題は「必要な中間項」でなく、「諸階級」から当然論理的に追跡できる問題でもない。またそのような意図を達成するためには租税による分配関係の変更は捨象することが必要だと考えるのである。かくして、古典学派の非歴史的態度を反省し、「必要な中間項」を明らかにするマルクスの方法はポリティカル・エコノミー批判、財政問題の段階論、ないし政策論への追放、経済学からの排除、原理論としての経済学の純化＝確立へと結論づけられるのである。

マルクスが「資本論」の副題として掲げたごとくポリティカル・エコノミー批判を通じて彼の理論が確立されたことはいうまでもないことである。マルクスの批判は、武田教授も指摘されたように、かれらの非歴史的態度に向けられたものであり、また「必要な中間項」の欠如＝経済学的諸範疇相互間の直接的適合にたいする批判であるが、かれらのそのような誤りの原因を彼らが政策論を含んでいることだとは指摘していない。マルクスは「経済学がブルジョア的であるかぎり、すなわち、資本主義的秩序を社会的生産の歴史的・一時的な発展段階とは解しないで、逆にその絶対的で窮極的な姿態と解するかぎり、経済学は、階級闘争がなお潜在状態にあるか、またはただ孤立的な現象において顕現する間だけ、科学たりうるにすぎない」¹¹⁾と指摘している。イギリスにおける古典経済学は階級闘争が未発展な時期のものとして、その最後の偉大な代表者たるリカードウが、「階級的利害の・すなわち労賃と利潤との・利潤と地代との・対立をば、素朴にも社会的な自然法則と解することにより、ついに

11), 12) マルクス「資本論」長谷部訳(1), 昭和21年, 123ページ。

意識的に、彼の諸研究の枢軸たらしめている」¹³⁾ ことに重い科学的評価をおいている。

武田教授によれば、ケネーよりもスミスが、スミスよりリカードウが、リカードウよりマルクスが、経済学の原理論としての理論的純化の発展であり、財政論ないし政策論を原理論から分離してきた過程とし、科学としての発展だとされているが、マルクスは教授のように一義的にスミスよりリカードウがすぐれており、科学的だとは評価していない。マルクスはリカードウの一方におけるスミスよりの大きな進歩と他方ではスミスに比しての視野の狭隘さを指摘している。スミスは未開時代（資本制社会以前）と区別される労働力の発展が、「労働が賃労働に転化され、そして労働条件が一方では土地所有として、他方では資本として労働と対立する瞬間」¹⁴⁾ から開始されることを強調し、それゆえ、労働者が自ら労働の結果をもはや取得しえない条件が発生したことを認識している。このような資本制生産が前提されるならば、対象化せる労働が生ける労働の一部分を無償で取得すること、すなわちこれを支払うことなしに取得する以外のなにものでもないこと、「スミスがリカードよりすぐれている点は、彼が資本主義的生産とともに、この変化が現われることを強く力説していることである。これに反して、彼は次の点においてリカードに劣っている。すなわち、彼はつねに、だが彼自身によって、彼自身の展開を通じて否定された見解……によってつきまともわれていることである」¹⁵⁾ と指摘したマルクスの評価をあげることができる。またマルクスは、総収入と純収入に関するスミスの見解における諸矛盾を批判しながらも、スミス自身が提出した疑問を「正しく解決しているということではなく、彼がそもそもその疑問を提出しているということが、彼のリカードよりも卓越している点なのである」¹⁵⁾ と述べている。さらに、「国富論」第1篇の諸章（第6, 7, 8章）におけるスミスの偉大な功績と理論的な弱点を指摘しつつ、マルクスは次のようにいう。「リカードがA・スミ

13) マルクス「剰余価値学説史」マル・エン全集26・I、昭和44年、49ページ。

14) マルクス、同上、65ページ。

15) マルクス、同上、88ページ。

スよりすぐれているのは、これらの外観上の、結果的には現実の矛盾によって惑わされていないことである。彼がA・スミスより劣っているのは、ここに一つの問題のあることにまったく気づいていないこと、したがって、価値法則が資本形成とともにとるところの特殊な発展によって、ほんの一瞬のあいだも当惑させられることなく、煩わされもしていないということである。』¹⁶⁾このように、マルクスはリカードウにおけるスミスにたいする大きな進歩をみながら、他方においてその視野の狭隘さを指摘しているのである。こうしてマルクスは、スミス、リカードウの古典派経済学の大きな業績——俗流経済学に対比してマルクスは批判的経済学者ともいっているが——を評価しつつ、かれらのブルジョア的視野の制約による限界を批判しなければならなかったのである。その点では、マルクスのリカードウ批判は武田教授の指摘されているとおりである。そして教授によれば、前述のごとく資本制生産様式を社会的生産の永久的な自然形態と解したリカードウの非歴史的態度が、結局「必要な中間項をとびこして、直接的な仕方では経済上の諸範疇のあいだの一致を証明しよう」とする誤った結果に導かせ、またその経済学に「つよい実践的、政策的性格をあたえている。」すなわち、非歴史的態度こそが、租税を「単に理論的原理の適用」ではなく、「適用」以上のものをふくませることになる¹⁷⁾。そこから、マルクスの古典学派批判の一面としての政策論批判、その経済学からの追放の見解が出てくるのである。

だが、マルクスの古典学派批判、スミス・リカードウの評価とその限界指摘を武田教授のように把握してよいだろうか。以下その点について検討していきたい。

少し長文にわたるが、マルクス自身の文章を引用しよう。「ところで、リカードの方法は、次のようなものである。すなわち、彼は商品の価値の大きさは労働時間によって規定されるということから出発し、次いで、その他の経済的

16) マルクス「剰余価値学説史」マル・エン全集26・I, 74ページ。

17) 武田論文, 253ページ。なお、教授が問題にされる、マルクスのこの言葉の意味については後述する。

な諸関係や諸範疇がこの価値の規定に矛盾するかどうか、または、それがこの価値の規定をどの程度修正するか、を研究する。経済学の歴史におけるこのようなやり方の歴史的な正統性とその科学的な必然性とは一見しただけで明らかであるとはいへ、同時にまた、その科学的な不十分性も一見しただけで明らかである。この不十分性は、単に叙述の仕方のうちに（形式的に）現われるだけでなく、まちがった結論に導くものである。というのは、それに必要な中間項を飛び越えて直接的な仕方では経済学的諸範疇の相互の整合を証明しようとするのだからである。

歴史的には、この研究方法は正当であり、必然的であった。経済学は、A・スミスにおいて一種の全体にまで発展し、それが包括する領域はある程度まで確定された。だからこそ、セーは経済学を1冊の教科書のなかに浅薄に体系的にとりまとめることができたのである。……スミス自身は非常に素朴に、絶えまない矛盾のなかで動揺している。……しかし、最後にリカードがそのあいだに踏み込んで、この科学に向かって、生まれ！ と号令する。ブルジョア体制の生理学の——その内的な有機的関連および生活過程の理解の——基礎、出発点は、労働時間による価値の規定である。そこからリカードは出発し、いまやこの科学にたいして、……次のことについて答弁するように強要する。すなわち……単に過程の諸現象形態を反映し再生産するにすぎない科学（したがってまたこれらの現象そのもの）が、ブルジョア社会の内的関連つまり真実の生理学の土台またはその出発点をなすところの基礎にそもそもどこまで適合するかということ、すなわちこの体制の外観上の運動と真実の運動とのあいだの矛盾はそもそもどんな事情にあるのかということについてである。……この科学的功績と緊密に結びついているのは、リカードが諸階級の経済的対立を——その内的関連が示すとおり——暴露し、言い表わしていることであり、したがってまた、歴史上の闘争と発展過程との根源が、経済学のなかで理解され発見されているということである。

以上のことからまた、彼の著書の非常に奇妙で必然的にまちがった構成が生

れる。……こうしてリカードの理論は、もっぱらその著書のはじめの6章の中に含まれている。私とその著書の構成に欠陥があるというのは、この部分に関してである。……しかし、理論的部分(はじめの6章)の欠陥ある構成は、偶然ではなく、リカードの研究方法そのものから、また彼が自分の研究に課した特定の課題から生じている。それは、この研究の仕方そのものの科学的不十分さを示している。……

その独創性、基礎的見解の統一性、単純性、集中性、深さ、新しさおよび包括性のために、このはじめの二つの章が与えるところのこの理論的満足感は、この著書の手を進むにつれて必然的に失われる。そこでも、われわれはどこどこで個々の独創性に心を奪われる。しかし、全体としては倦怠と退屈を催させる。先へ進んでも、もうそれ以上の発展はない。それは、さまざまな外からもちこんだ材料にたいする同じ原理の単調な適用から成っているが、これらの原理の論争的主張から成っているか、そうでない場合は、ただ繰り返しか復習かのどちらかであって、せいぜい最後の部分でここかしこに人目をひく結論が引き出されているにすぎない。」¹⁸⁾

以上の長文にわたるマルクスからの引用を、武田教授の見解と対比してみると、次の点をわれわれとしては注目しなければならない。マルクスは、スミスによって、経済学が包括する領域がある程度まで確立し、一つの全体=体系にまで発展したことを評価しつつ、同時に、彼的方法的欠陥として、経済学的諸範疇の説明におけるスミスの二面性を鋭く指摘している。すなわちスミスが、一方ではブルジョア経済体制のかくれた内的関連、いわばその生理学を追求しているが、他方ではブルジョアの生産様式を、その外的に現われる生活形態を、その外的諸関連を説明する、という二面性を明らかにしたのである。そしてマルクスが明らかにしたスミスからリカードウへの発展、科学としてのリカードウの歴史的意義は、労働時間による価値の規定を徹底的に固守したこと、またこの規定にもとづいて、彼以前の経済学者たち(とくにスミス)によって展開さ

18) マルクス「剰余価値学説史」マル・エン全集、26・II、210-16ページ。

れたその他の経済学的諸範疇がブルジョアの生産関係の理論的表現として、どこまでその基礎に対応し、どこまで矛盾しているか、を研究したということにあった。ここでマルクスが指摘するスミス経済学の「科学としての未成熟さ」は、スミスのなかに第5篇「主権者または国家の収入について」が論じられていることではなく、スミス経済学のもつ二面性——深遠な部分と通俗的な部分——である。スミス経済学が国家を論じ、財政問題を含むことは、経済学体系の領域を確定したものとして評価さるべきであろう。スミス経済学が財政範疇を含めた体系的領域を確定したことは、財政範疇、国家範疇を媒介することによって、基本的範疇、基本的階級の内的関連も、現実的・包括的規定性ももたらうものと考えたからである。

経済学の包括的領域を確立し、その中で財政論を位置づけたスミスではあったが、彼のもつ深遠な考察の仕方と通俗的な仕方という一貫した矛盾にたいして断呼とした批判を展開したリカードは、経済的諸範疇の内的関連を多様な現象形態と区別しようとつとめるが、それらを超歴史的、自然的なものと考えており、したがってそれらを与えられた前提として出発するがゆえに、それらを「分析的方法」によって、それらの統一に還元させることに徹底する。したがってそれらの「発展形態を分析し、それらの発展形態の内的紐帯を探りだす」¹⁹⁾ ことには関心をもたなかった。だからリカードの理論には非発展的欠陥が生じ、それは彼の誤った研究の仕方から生じるのである。マルクスの上記の引用文はそのことを鋭く指摘している。

武田教授は「われわれは一方でマルクスとともにリカードが租税を論じている部分は、単に理論的な適用を含んでいるにすぎない」、いかえれば彼の租税論は経済学のなかに解消されており、他方において彼の非歴史的態度が「単なる適用以上のものをふくんでいること」になり、そこから彼の政策論が展開されると述べて、その点に科学としての未成熟さを指摘されるのである。しかしマルクスは、リカード「原理」の租税を論じた部分が理論的な原理の適用を含

19) マルクス「資本論」長谷部訳(1), 134-5ページ。

むにすぎず、体系的な主張になっていない、それは彼の研究方法そのものの科学的な不十分さを示していることを指摘し、批判しているのである。すなわちマルクスは、リカードの分析的方法の科学的な不十分性が租税を理論的な原理の単なる適用にすぎないものにし、彼の理論を非体系的・非発展的なものにして、これを批判したのである。マルクスの「理論的な原理の適用を含むにすぎない」という指摘の意味は、租税を、無媒介に、直接に価値法則、あるいは一般的法則の証明もしくは表現しようとしたリカードウの方法の欠陥を非難したもとのとして理解されるべきであろう。そのような意味においてリカードウにおいて租税論はその経済学の中に解消されたといえるだろうが、それはむしろリカードウの方法論の欠陥にもとづくものであって、武田教授のように、租税問題の原理からの清算のプロセスとして理解すべきではない。古典学派の最大の完成者であるリカードウの批判的継承としてマルクスの分析は、当然のことながら、ブルジョア社会の現実から出発して、租税範疇を含めた経済的諸範疇の発展形態を分析し、それらの発展形態の内的紐帯を探りだすことであって、その分析にもとづいて、国家、外国貿易、世界市場へと展開する経済学の体系が確立されるのである。以上のことを通じていえることは、マルクスのスミス、リカードウに対する批判は、かれらの分析的方法の欠陥であってそこから経済学的諸範疇把握の誤りを指摘することにあつて、かれらが国家ないし財政問題を論じたことに向けられたものではない。またスミス、リカードウとマルクスの相違、スミス、リカードウからマルクスへの発展を、財政問題を「原理論」から分離すること、経済学を原理論として純化することにあつたということでもない。

III

経済学を資本制経済の内的構造の生理学と理解される武田教授は、その完成したものがマルクス経済学であり、それは「資本論」という完結した体系として示されており、そこにおいては、財政問題が捨象され、財政論は経済学の体

系の一つの重要な、かつ不可欠な部分でないことは、経済学発展の歴史からみても当然なことでされている。かくして宇佐美・島向教授の所説を批判される武田教授は、経済学の体系、とくにマルクスのいわゆる経済学のプランについて独自の解釈と見解を述べられる。

前節でも指摘したように、武田教授によればマルクス経済学の理論体系の確立は経済理論であると同時に経済政策論でもあるところのポリティカル・エコノミー——武田教授によれば古典派経済学の本質である——を批判することを通じてなされたものであった。このような前提から出発される教授は、マルクスのいわゆる経済学のプランに示された6項目を「経済学の理論的体系のプラン」²⁰⁾とする見解に疑問を出されるのである。

同教授によれば、マルクスのいわゆる経済学のプランは、まず第1に『ある一国を経済学的に考察する場合』の『篇別構成』についてのべられたもの²¹⁾であって、その意味において、「これを、資本制国家についての経済学的考察のプランである」²²⁾と解されている。これと関連して、第2に、プランは、「そのような資本制国家を念頭におきつつ展開されてきたところのポリティカル・エコノミー、すなわち、経済理論であると同時に経済政策論でもあるところの『ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述する』にあたっての順序をのべたものである」とみて、その意味において、これをポリティカル・エコノミー批判のプランである²³⁾と解されている。

武田教授はマルクスの経済学プラン解釈をこのようなものとして理解されることによって、プランにあげられた諸項目をとりあげられ、それらは、原理論としての「資本論」体系を基礎にして展開される、段階論、経済政策論のプランとして説明されるのである。すなわちマルクス経済学の確立をポリティカル・エコノミー批判の経済学と独自の解釈をされる武田教授は、ポリティカル・エコノミーの一面をなす経済理論を批判的に完結させたものが、「資本論」の体

20) 武田論文, 266ページ。

21), 22) 武田論文, 266ページ。

23) 武田論文, 266ページ。

系であり、それを基礎とし、「さらにこのようなプランにしたがって、ポリティカル・エコノミーの他の一面をなす経済政策論の批判」²⁴⁾が積極的に展開されたのだと説明される。かくして、マルクスのいわゆるプランなるものは、武田教授の説明からすれば、「資本論」であきらかにされた原理、もしくは一般法則によって展開される、段階論あるいは政策論のプランということになってしまうのである。

「資本論」がポリティカル・エコノミー批判を副題としていることを強調されている武田教授にとって、以上のような着想・解釈が生ずるのは当然かもしれないが、われわれは武田教授のような独自の、あるいは勝手なマルクス解釈には同意しえない。マルクスのプランがポリティカル・エコノミー批判のプランであるとするならば、そのポリティカル・エコノミー批判を通じて完成された「資本論」のみが、資本制経済の生理学として、その経済体制の内的諸連関をあきらかにしうる理論的体系であって、同じくポリティカル・エコノミー批判を通じて完成される筈であったプランの「資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場」の諸項目は、ポリティカル・エコノミー批判としての性格しかもちえず、理論体系たりえないとされることは、自己矛盾に落ちいった見解であろう。そのような武田教授の見解が生ずる根因は、いうまでもなく、教授のマルクスのプランにたいする独自の解釈、すなわち、マルクスの経済学のプランなるものを、「資本制国家を念頭において」展開されたものだという考え方にありと思われる。

武田教授の独自の解釈の第1点は、マルクスの経済学のプランを「『ある一國を経済学的に考察する場合』の『篇別構成』についてのべられたもの」²⁵⁾だとされることである。この文章はマルクス「経済学批判序説」の「経済学の方法」の冒頭に示された「われわれがある与えられた國を、経済学的に考察する場合……」²⁶⁾の引用である。そして、その「ある与えられた國」は、特定の

24) 武田論文, 267ページ。

25) 武田論文, 266ページ。

26) マルクス「批判」346ページ。

一国であるとともに、資本制経済をいとなむかぎりでのすべての国をさすものとして、したがって「資本制国家についての経済学的考察のプラン」(傍点は武田教授)と主張される。その理由として、邦訳が経済学のプランにあたる部分の „Die Einteilung offenbar so zu machen, …” を「『篇別は、……』」ではなく、「『経済学の篇別は……』と「経済学」という原文にない言葉を補っていることを指摘され²⁷⁾、もし補うとすれば、それは「ある一国を経済学的に考察する場合の」の篇別となるべきだと主張されている。

なるほど、武田教授の指摘されるように原文には「経済学」という言葉はない。しかしこの「経済学の方法」の部分は、有名なマルクスの抽象から具体への上向法を説明したものであることはいうまでもない。マルクスは「学問的に正しい方法」として示した抽象から具体へと自己運動する経済学的諸範疇の過程を経済学の諸体系として理解したのである。「マルクスはこの経済学的諸範疇 (die ökonomischen Kategorien) の過程においても、……主体が、ここでは近代ブルジョア社会が与えられている」²⁸⁾ということ、だから「諸範疇は、この一定の社会の・この主体の・定有形態を、実存諸規定を、しばしばただその個別的諸側面のみを表現するという、だから経済学もまた科学的にはかかるものとしての近代ブルジョア社会が云云されるところからはじまるものでは決してないということ、がつねに銘記さるべきである。このことが銘記されねばならないのは、それが経済学の篇別についてもまさに決定的な理由となるからである」²⁹⁾と述べ資本、土地所有の関連と序列を明らかにしている。この「経済学の篇別」なる邦訳についても、原文では「経済学」という言葉はないけれども、マルクスの文章を素直に読むならば、経済学の諸範疇の序列が篇別を意味していることは、当然のことであって、そのように考えるならば、「経済学の篇別」として、原文にない「経済学」という言葉を補っても決して不当ではない。したがって最後の部分の武田教授が指摘された「篇別……」も「経済学

27) 武田論文, 272ページ。

28), 29) マルクス「批判」356-7ページ。

の篇別」と理解して一向に差支えないと思われる。こうしてマルクスは「ブルジョア経済の体系をつぎの順序で考察する。……」として、「資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場」という「経済学の篇別」、すなわち、かれのいわゆる経済学のプランを示したのである。したがって、プランに示されている諸項目は「ある一国」を経済学的に考察するさいに必要な、かつ無視できないもの³⁰⁾として理解されるようなものではない。経済学の篇別＝諸項目の序列はマルクスによれば、「それらが、近代ブルジョア社会において相互にもつ関係によって規定されている」³¹⁾ものであって、経済学的諸範疇の自己運動の体系であり、経済学の体系にほかならないものである。

武田教授によるプラン解釈の独自性は、それをポリティカル・エコノミー批判のプランと解することにある。その背景にあるものは、古典派経済学＝ポリティカル・エコノミーの本質を経済理論であると同時に経済政策論であるときみなして、そのようなブルジョア経済学を批判することによってマルクス経済学の理論的体系＝資本論が完成されたという見解が横たわっていることは前述したところである。そこで、「資本論」を基礎として、「このようなプランにしたがって、ポリティカル・エコノミーの他の一面をなす経済政策論の批判を積極的に展開しようと計画した」³²⁾と説明される。すなわち、マルクスのプランは政策論のプランということである。武田教授はこのような主張のために、1858年2月21日付のマルクスのラッサールへの手紙にみえる「ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述する」という言葉を引用されている。武田教授にあっては、古典派経済学が政策論（とくに財政論）を含むことは科学としての未熟さを示し、したがってこのようなものとしてポリティカル・エコノミーは誤りであると考えられているがゆえに、マルクスの「ブルジョア経済学の体系を批判的に叙述する」という言葉は、直ちに政策論の批判と結びつけられるのだが、はたして、マルクスのこの言葉を政策論批判と解釈し、したがってプランも政

30) 武田論文、267ページ。

31) マルクス「批判」359ページ。

32) 武田論文、267ページ。

策論批判のためのプランとして解釈しうるものだろうか。

先述のマルクスのラッサールへの手紙は次のようなものである。「さしあたり問題になっている労作は、経済学的範疇の批判である、あるいは批判的に叙述されたブルジョア経済の体系といってもよからう。それは体系の叙述であると同時に、叙述を通じてなされる体系の批判だ。……叙述——その仕方のことだ——は、全く学問的であり、したがって普通の意味での警察令違反的ではない。全体は6部に分れている。1. 資本について。(2, 3の準備的な章を含む) 2. 土地所有について。3. 賃労働について。4. 国家について。5. 国際貿易。6. 世界市場。当然に僕は、ときどき、他の経済学者たちに対する批判的顧慮を加えざるをえない。特にリカド——彼でさえ、ブルジョアとして、厳密な経済学的視点からでさえ、誤謬を犯さざるをえなかったかぎりにおいて、——に対して論争せざるをえない。……」³³⁾(傍点はマルクス) この少々長く引用したマルクスの言葉を忠実に読むならば、「経済学批判」とは、経済学的諸範疇の批判の体系であり、それはブルジョア経済の体系の批判的叙述だということである。「私はブルジョア経済の体系をつぎの順序で考察する。——資本、土地所有、賃労働、それから国家、外国貿易、世界市場。」という「経済学批判」の序文冒頭の文章を読むとき、彼のプランを特徴づけるものは、有機的な、生きた全体としてのブルジョア経済の体系的考察である。資本主義を有機的全体として考察しようとするれば、そのモメントを形成しているいろいろな生産関係の反映である経済学的諸範疇は相互に内的関連をもっているはずであるが、それは個々の経済学的諸範疇のうちに直接表現されるものではない。個々の経済学的諸範疇はむしろ、それぞれ自立化する契機をもち、自立化したものであるかのように現象する。それらの諸範疇のあいだの内的関連、したがってまたそれらの全体との関連——すなわちより簡単な経済的範疇はすでに与えられた具体的な生きた——全体の抽象的—面的関係としてのみ実存する——、そしてそれらが、それぞれどのような契機で運動し、自立化し、それらの全体でもって一

33) マルクス「批判」304-5ページ。

つの体系を構成し、それは経済学的諸範疇そのものの批判によって明らかになる。マルクスにとって、その仕事は、古典学派による経済学的範疇の相互関連の分析を直接批判の対象にせざるをえず、その場合リカードウが、古典学派の完成者として最も徹底的な批判対象にされたのである。このことは先に引用したマルクスのラッサールへの手紙にも書かれているとおりである。

さらにこれらの範疇そのものの批判を通じて明らかにされることは、経済学的諸範疇の序列は、「それらが近代的ブルジョア社会において相互に対してもつ関係によって規定されている」ことであり、「むしろ近代ブルジョア社会の内部におけるその篇制が問題なので」あった。マルクスは、そのような意味でブルジョア経済の体系を考察する諸項目を、経済学の篇別としてとりあげたのである。したがって、マルクスのいわゆる経済学のプランは武田教授の主張されるようなポリティカル・エコノミー批判のプランではなくして、ブルジョア経済の体系を考察するために、厳密な論理的序列にもとづいて構成された経済学的諸範疇として把握すべきものである。しかも、マルクスがいうように、このような体系の叙述は同時に、叙述を通じてなされる体系の批判でもあった。すなわちマルクスの経済学の体系は、経済学批判の体系であり、本質的には、それは経済学的諸範疇の批判の体系であったのである。マルクスの「経済学批判」とは、このような意味において理解されるべきもので、そのことは「資本論」の副題につけられた「経済学批判」にも妥当するものである。このように、「経済学批判」とは、武田教授のいわれるように政策論批判の意味ではなく、政策論批判を通じて、「資本論」体系から、政策論とくに国家ないし財政が清算され、原理論とし純化され、他方では、「資本論」にもとづいた政策論批判のためのプランとして、いわゆる経済学のプランが計画されたというものではない。

IV

以上、武田教授が「マルクス主義経済学と財政学」においてのべられた主張、

ポリティカル・エコノミー批判としての財政論を検討してきたが、それはくりかえすまでもなく、次のようなものであった。すなわち武田教授によれば、一方においてポリティカル・エコノミーを経済理論として純化し、原理論としての「資本論」体系を自己完結させ、財政問題は経済学の原理論では解明されず、財政学には原理にないと主張される。そして財政問題を法則的解明の彼岸に、段階論、政策論の領域に追放されるのである。このような見解は、宇野教授によって提起された三段階論（原理論、段階論、現状分析）に基本的立場をおくものであるが、ここではマルクス経済学が窮極的に解明しようとした資本制社会の運動法則が、生成・発展・消滅という体制の移行と変革の法則でもあることが看過されたこと、経済学の方法が唯物史観と堅く結びついていることが無視されていること、したがってまた抽象から具体へと上向法自体の論理的性格が観念的にしか把握されていないことは、しばしば指摘されることである。

マルクスが「資本、土地所有、賃労働、国家、外国貿易、世界市場」というプランに示した篇制で考察しようとした「ブルジョア経済の体系」とは、一つの有機的な、生きた全体として、まさに「多くの規定と関連をもつ豊富な総体性」³⁴⁾である。具体的なものが、具体的であるのは、それが多様な諸規定の統一・総括だからにほかならず、だから多様な規定と関連をもつ豊富な総体は上向の過程として、結果としてあらわれる。したがってマルクスは抽象から具体への過程の結果として「労働、分業、欲望、交換価値のような簡単なものから、国家、諸国民間の交換、世界市場にまで昇っていくところの経済学の体系化」³⁵⁾を確認したのである。

「資本論」の叙述内容が、基本的にはブルジョア経済の内的編成を解明する理論体系であることには相違ないが、そこで取扱われる経済学的諸範疇は、マルクスによれば、その最も簡単なものですら、「すでに与えられている具体的な生きた一全体の抽象的一面的関係として以外には、決して実存しえない」³⁶⁾

34), 35) マルクス「批判」347ページ。

36) マルクス「同上」348ページ。

ものである。マルクスがプランで示した諸項目の序列は、有機的全体としてのブルジョア経済の体系——多くの諸規定と諸関係とをもつ豊富な総体性としてのそれ——を「精神上具体的なものとして再生産するための・思惟にとつての様式」における理論的展開の序列であり、その序列は「具体的なもの自体の成立過程」をあらわすものではない。この理論的展開方法の前提としては、ブルジョア経済の現実的総体——「実在的な主体は依然として頭脳の外部でその自立性において存続する」³⁷⁾——がつねに表象としておもいうかべられていなければならない。ブルジョア経済の体系の理論的展開がなされるためには、ブルジョア経済の総体を篇制する多くの経済的諸範疇のあいだの内的関係がしたがってまたそれらの総体にたいする関係が、経済学的諸範疇の分析と批判を通じてなされていなければならない。経済学の理論体系はいわゆる「純粋な理論」ではなく、現実の歴史過程からの抽象によって「歴史的な理論」でもあった。したがって、段階論、政策論は、「資本論」の理論的諸命題もしくは一般法的法則から観念的・演えき的に展開されるというものではない。このような意味において、武田教授のいわれるように、マルクスの経済学のプランを「資本論」であきらかにされた理論もしくは一般法的法則によって、まず「ある一国」の資本、土地所有、賃労働等を分析し、それが資本主義の発展のいかなる段階にあり、相互にいかなる関連をもっているかをあきらかにするとともに、国家および国家のおこなう諸政策、国際貿易、世界市場等を、その発展段階における資本主義にとって必然的なものとして、一面において肯定的に理解すると同時に他面においては否定的に理解することによって、種々な経済政策論の歴史的意義と歴史的限界とを解明しようと³⁸⁾するものではない。

先述したようにマルクスの「経済学批判」体系——いわゆる経済学のプラン——は、「経済科学の全複合体の体系的総括」として、したがってブルジョア社会を多くの諸規定と諸関係とをもつ豊富な総体性として理解している。現

37) マルクス「批判」349ページ。

38) 武田論文、267ページ。

行「資本論」が「資本制生産様式の内的構造のみを、いわばその観念的平均において叙述したもの」であるかぎり、そこでの一般的諸法則、原理は、なお「具体的な生きた一全体」の抽象的・面的関係として実存するものであり、「経済学批判」体系での上向——諸規定の総括——は、宇野教授によって代表される見解のように、「吾々の頭脳における抽象的な所謂純粹の資本主義社会」の内的編成のみに止まるものではない。内的編成とその関連は、論理的・必然的に「ブルジョア社会の国家形態での総括、それ自身との関連で考察」され、内的編成の諸範疇にいっそう具体的規定性が措定されねばならない。このことは、商品生産や再生産の法則から、無媒介に国家の範疇を説明することではなく、また経済過程の総括者として国家を把握することを意味するものでもない。「国家」の項目で考察されるのは、国家のブルジョア社会における影響そのもの、いいかえれば、国家の「経済的力能」・国家の経済運動法則である。国家はいうまでもなく、土台たるブルジョア社会の経済的諸関係によって規定され、ブルジョア社会によって敵対的諸階級への社会分裂の必然的結果として生じた支配と従属の一定の関係の形態である。したがって「国家」の項目では、ブルジョア社会の実践主体たる常備軍、警察、官僚機構などの「不生産的諸階級」、それらを維持するために必要な租税、国債、国家信用などが考察され、これらが生産関係、交易関係との関連において分析されようとするのである。